

## 〔研究ノート〕

## 俳諧ネットワークにおける寛政期以降の呉春

呉春(1752～1811)は江戸時代の絵師で、月溪という号でも知られています。絵画と俳諧の両面で大きな足跡を残した与謝蕪村(1716～83)の門人であった呉春は、のちに円山応挙(1733～95)とも交流しながら穏やかで洗練された印象の画風を作り上げました。また、もとは蕪村門人だったこともあり、絵画のみならず発句や連句といった俳諧活動にも携わっていました。しかし、蕪村が亡くなり、さらに友人の高井几童(1741～89)が寛政元年に没してから、俳諧から離れていったという見方があります[『池田人物誌 下』吉田鋭雄・稲東猛編、1924年]。呉春の刊本における挿絵の仕事を見ていくと、現在確認できるかぎりでは、寛政年間以降(1789～)に集中しており、橘楠谿著『東遊記』(寛政七年序)、秋里籬島編『東海道名所図会』(寛政九年刊、図1)といった本のなかで呉春の挿絵を見ることができます。したがって、寛政初年頃を境にして、呉春がより本格的に絵師として仕事をこなすようになっていったのだと考えることはできるでしょう。ただし、挿絵という点では俳諧をまとめて編んだ書籍である俳書への参加が最も多く、とくに宮紫暁(1745～

1806?)の編になる本への参加が多いことは注目されます。ここでは、紫暁の編著との関わり方などから、寛政年間以降における呉春の俳諧周辺の活動について確認します。

呉春と関係の深かった俳諧師としてよく知られているのは、蕪村の夜半亭という俳号を継承した几童です。几童の催した句会に呉春はよく参加していたようで、几童編の句集や几童の残した句稿にもしばしばその名が見えます。また、天明八年(1788)十月には箕尾、翌年の三月には吉野へと連れだつて出かけたことが知られています[『遊子行』、『花さくら集』]。几童が亡くなったのは寛政元年(1789)で、几童の追悼句集としては、『鐘筑波』(寛政二年刊)、大祥忌追善『この時雨』(寛政三年刊)、七回忌追善『雪の光』(寛政七年刊)、十三回忌追善『夢の猪名埜』(享和元年(1801)刊、図2)が刊行されています。これらの句集には呉春も参加しており、前の2冊では発句が収録され、後の2冊では挿絵を寄せています。これらを編集したのが几童門人であり、春夜楼の号を几童から受け継いだ紫暁で

す。紫暁の別号には聴亀庵や春宵楼があります。

紫暁は俳書をいくつも刊行しており、紫暁の刊行していた春興帖は『あけぼの草紙』と呼ばれています。現状で私が確認できたのは寛政二年、三年、五年のものだけですが、呉春はそのいずれにも挿絵で参加するとともに、必ず発句が入集しています。毎回のようにその名が見えることから、少なくとも寛政年間中期までの呉春は、紫暁の社中に属することで俳諧活動に携わるとともに、俳諧関係の人々との交流を続けていたと推測できます。紫暁との関わりは従来注目されていませんでしたが、紫暁との関係性については注意する必要があります。

『あけぼの草紙』のほかにも呉春が挿絵を加えている寛政年間以降の俳書では、定雅編『しなえらび』(寛政四年、図3)、其成編『画賛集』(寛政五年)、五雲編『あきの別れ』(寛政七年、図4)、大江丸編『秋存分』(寛政九年)、瑞馬編『高名詞画』(享和三年)が確認できました。これらの句集の場合、呉春は挿絵のみの参加となっており俳諧は収録されていない点が『あけぼの草紙』とは異なっています。世間的に絵師としての実力が広く認められ、俳書であっても発句よりは挿絵の方が求めら

れた様子がかがわれ、俳諧活動そのものからは徐々に遠ざかっているように見えることは否めません。

一方で、蕪村が中心となって刊行した俳書を小冊子にまとめ、文化六年(1809)に改めて出版された『俳諧蕪村七部集』では呉春が序文をしたためています。寺院の障壁画制作といった大きな仕事も増え、寛政期半ばを過ぎたからは徐々に絵画制作が活動の中心となっていったと見られる呉春ですが、晩年に至って再び俳諧世界での存在感を示した出来事だったといえるでしょう。また、絵師として高名を得てからも、俳諧関係のネットワークのなかでは蕪村の高弟として尊敬され、俳諧でもその存在を認められていたと想像されます。現段階では、寛政六年の呂蛤編『雁風呂』に見られる「遅き日や天狗のもどす伊勢参」が最も下がる時期の句作であり、それ以降に作られた俳諧は確認できていませんが、先に触れた紫暁周辺を中心としてまだ知られていない呉春の句の探求も続けていきたいと思います。(仁方越洪輝)

※図2～4は国書データベース

(<https://kokusho.nijl.ac.jp>)より転載しました。



図1 『東海道名所図会』巻二  
(大和文華館 鈴鹿文庫)



図2 『夢の猪名埜』「五仏図」  
(東京大学総合図書館 洒竹文庫)



図3 『しなえらび』「紅葉図」  
(東京大学総合図書館 竹冷文庫)



図4 『あきの別れ』「柳図」  
(東京大学総合図書館 洒竹文庫)

季刊 美のたより No.226

令和6年4月5日

発行 大和文華館